言語学論叢第 13 号 (1994)

蓋然性判断のムード形式と疑問化

牧原　功

1　概要と目的

これまでいくつかの研究によって，いわゆる「推量」を表すムードの形式は疑問文との共起に制約があることが指摘されている。[1]しかしながら，どのような形式が疑問化可能でどのような形式が疑問化不可能なのかという判定は，研究者によってかなりのばらつきが見られる。

また，疑問化可能な形式と疑問化不可能な形式が存在するのはなぜかという点についても幾つかの研究がなされているが，十分な説得力をもつものは少ないように思われる。

本稿では，ムード形式の疑問化における共起制限について現象の再検討を行い，なぜそのような現象が生じるのかを明らかにすることを目的とする。

2　先行研究

「推量」のムード形式が疑問化される際に共起制限が生じるという事象については，いくつかの先行研究が存在するが，そのなかから寺村 (1984)，森山 (1989b，1992) をとりあげこれまでにどのような考察がなされてきたかを概観しておく。

2.1　寺村 (1984)

この研究では現象の指摘がされているにとどまるが，ダロウ，マイ，ヨウダ，ラシイ，ソウダの形式が疑問化された場合の許容度を次の様にまとめている。

疑問形になるか	○	○	△	△	×
	ダロウ	マイ	ヨウダ	ラシイ	ソウダ（伝聞）

また，ヨウダ，ラシイについては疑問化は難しいかもしれないが，次の様な文では十分許容できるのではないかと述べている。

[1]ここで用いる「疑問化」「疑問表現」というのは，形態的に～カが文末に位置し，上昇のイントネーションを持つものを指す。

(1) それでは，もう駄目なようか？

(2) 彼はそのことを知っているらしいか？

2.2 森山 (1989b)

現象の把握において，寺村 1984 と異なり，以下に示すようにダロウだけが疑問化可能であり，それ以外の形式は疑問化不可能とされている。[2]

(3) 歌うだろうか？

(4) *歌うようか／はずか／みたいか／かもしれないか／にちがいないか？

そしてこのような現象を次の様に考察している。

- 話し手の確定的な情報でない疑問文の中に，話し手固有の意味把握をする要素は，以下の例の様に出現できない。

(5) *嬉しいことに，彼は日本へ行くか？

(6) *はからずも，君は何講座の学生ですか？

(7) *おそらく，どこに彼はいますか？

- 蓋然性判断のムード形式は，話し手の命題内容に対する固有のとらえかた（不確実性）を表すものである。
- 疑問文とは，話し手から真偽判断を放棄されたものであり，話し手の主観的な判断を表す蓋然性判断のムード形式とは共起できない。
- ダロウが疑問化可能なのは，問いかけ性を持たない形式として marked な形態として機能するためである。

このような考察において，問題となるのは次の２点であると思われる。

A. 疑問化された場合でも，ムード形式は話し手の主観的な判断を表していると考えていいのか。

B. ダロウが疑問化可能な理由として,「問いかけ性を持たない marked な形式である」というものを想定するのは正当性があるのか。ダロウカがなんらかの別の要因によって許容される表現となっており，その結果問いかけ性を持たないという性質が付与されていると考えるべきではないのか。

[2]同様の現象把握を行っているものとして高山 1986 がある

2.3 森山 (1992)

現象の把握は森山 (1989b) と同様であるが，上述の B の点について修正がなされている。考察の要旨は次の様なものである。

- 疑問文では，yes-no 疑問文の場合は肯定と否定，不定疑問の場合はその不定内容というように，矛盾対立する内容が，選択されるべき関係にある。

  彼は一年生ですか？＝彼は一年生ですか，あるいは一年生ではありませんか？

- 推量の表現とは，ある内容を述べるとともに，それに矛盾対立する内容も成立する可能性があることを暗示する。

  彼は一年生かもしれない。が，同時にそうでないことも想定されないわけではない。

  彼は一年生のようだ。が，同時にそうでないことも想定されないわけではない。

- 敢えて一つに決しないという意味の在りかたー推量ーと，選択を迫って一つの意味に決しようという意味の在りかたー疑問ーが共起すると，意味の関係として矛盾が生じる。
- ダロウは，結論にまだ至っていないー判断を形成する過程にあることーを表示す（＝聞き手情報非依存型の疑問文の存在）もので，推量の意味はそこから派生するものである。
- ダロウが本質的に推量を表すものではないということから，ダロウと疑問は共起可能となる。

ここでは森山 (1989) で問題とした２点のうち B について修正が加えられているが，全体の枠組みは変っておらず，A については全く問題としていない点が依然，問題として残っているように思われる。

3 現象の確認

ダロウ，マイはダロウカ，マイカと疑問化可能であるという点では一致するが，寺村がヨウカ，ラシイカを許容するのに対し，高山，森山はこれを許容していない。また，石神 (1992) [3]では，ダロウ，ラシイ，ソウダ（伝聞），ヨウダ，ミタイダ，ニチガイナイ，カモ

[3]国語学会平成４年度春期大会での発表による

シレナイのうち，非文となるのはニチガイナイ，カモシレナイだけで，ラシイ，ソウダ，ヨウダ，ミタイダはやや許容度が落ちるが許容しうるものとして扱っている。近藤 (1991) においても，伝聞のソウダは疑問化可能とされている。

このように，研究者のよって，どのような形式が疑問化可能であり，どのような形式が疑問化不可能なのかの判定に揺れが見られるため，調査によって現象の把握を試みた。

調査方法

日本語を母語とする47名に例文を与え，判定を求めた。判定は,「許容できない」,「かなり不自然だが許容するかもしれない」,「やや不自然だが許容できる」,「問題ない表現である」の4つから1つを選択させた。

また～カによる疑問表現は，ぞんざいであるという理由で許容されなくなる場合もあると考え，～デスカ，～マスカのような丁寧な疑問形を想定できるように () で付記した。[4]

調査結果

例文1　　雨が降る～

	問題ない	やや不自然	かなり不自然	許容できない
ダロウカ	47	0	0	0
カモシレナイ（デス）カ	0	0	5	42
ニチガイナイ（デス）カ	0	0	2	45
ヨウ（デス）カ	1	15	17	14
ミタイ（デス）カ	4	31	8	4
ラシイ（デス）カ	8	26	11	2
ソウ（デス）カ（伝聞）	17	28	1	1

全員が問題ない表現であるとした場合を10，全員が許容できないとした場合を0として数値化すると以下のようになる。[5]

ダロウカ　10　　カモシレナイカ　0.35　　ニチガイナイカ　0.14

ヨウカ　3.55　　ミタイカ　5.81　　ラシイカ　6.17　　ソウカ　7.66

[4] 丁寧体デスを用いた場合，明示されていなくても（ノ）デスカというように準体助詞のノが想定されやすくなるという傾向があるが，今回はこの点については問題を残している。

[5] 問題ない場合が3点，やや不自然な場合が2点，かなり不自然が1点，許容できないが0点として計算し，総和÷47×10/3という式で求めた。全員が問題ないとした場合が10点，全員が許容できないという場合が0点というスケールに位置づけていることになる。

例文２　（天気予報を二人で見ている時に聞き逃して）

明日は雨がふる～

	問題ない	やや不自然	かなり不自然	許容できない
カモシレナイ（デス）カ	0	1	7	39
ニチガイナイ（デス）カ	0	0	2	45
ヨウ（デス）カ	15	16	13	3
ミタイ（デス）カ	31	11	5	0
ラシイ（デス）カ	33	9	4	1
ソウ（デス）カ（伝聞）	31	14	1	1

許容度を数値で表すと次のようになる。

カモシレナイカ　0.99　　ニチガイナイカ　0.14　　ヨウカ　6.38

ミタイカ　8.51　　ラシイカ　8.58　　ソウカ　8.65

例文３　（奥さんに子供が寝たかどうかを見てこさせた後で）

どうだ，寝た～

	問題ない	やや不自然	かなり不自然	許容できない
カモシレナイ（デス）カ	0	0	3	44
ニチガイナイ（デス）カ	0	0	0	47
ヨウ（デス）カ	14	24	6	3
ミタイ（デス）カ	29	14	4	0
ラシイ（デス）カ	3	9	21	14

許容度を数値で表すと以下のようになる。

カモシレナイカ　0.21　　ニチガイナイカ　0　　ヨウカ　6.80　　ミタイカ　8.45　　ラシイカ　3.40

以上の調査から，ダロウ，カモシレナイ，ニチガイナイ，ミタイダ，ラシイ，ソウダのうち，ダロウは疑問化可能，カモシレナイ，ニチガイナイは疑問化不可，ヨウダ，ミタイダ，ラシイ，ソウダは許容度が落ちるものの疑問化可能であるということができる。また，ヨウダ，ミタイダ，ラシイについては，特定の文脈を与えると許容度が増すことがわかる。

4　それぞれのムード形式の表す意味

２節での調査結果から，疑問化可能なもの，疑問化不可能なもの，許容度はやや落ちるものの疑問化可能なものという３つのグループを想定することができるが，これらのグループごとに共通する性質が存在するかどうかについて考察することにする。まず，それ

ぞれの形式について「思うに」と共起するか,「〜によると」と共起するかをテストすると次の様になる。

	「思うに」との共起	「〜によると」との共起
ヨウダ	＋	＋
ミタイダ	＋	＋
ラシイ	??	＋
ニチガイナイ	＋	−
カモシレナイ	＋	−
ソウダ	−	＋
ダロウ	＋	−

ここで,「〜によると」と共起するが「思うに」とは共起しないものを，外部情報依存型,「思うに」と共起するが「〜によると」とは共起しないものを外部情報非依存型,「〜によると」とも「思うに」とも共起できるものを中間型と呼ぶことにする。また，活用しないムード形式であるダロウを真性のムード形式，ダロウ以外の活用する形式を疑似ムード形式として区別すると，次の様に分類することができる。

疑似ムード形式	外部情報依存型	ソウダ,（ラシイ）
	中間型	ヨウダ，ミタイダ,（ラシイ）
	外部情報非依存型	ニチガイナイ，カモシレナイ
真性ムード形式		ダロウ

２節での調査結果とこの分類とを比較すると，疑問化不可能としたニチガイナイ，カモシレナイは外部の情報に依存しない－話し手の全く主観的な判断を表す－形式であること，ダロウも外部の情報に依存しない形式であるが，ニチガイナイ，カモシレナイとは疑似のムード形式と真性のムード形式という点で異なることがわかる。また，許容度が落ちるものの許容されるタイプは，中間型のヨウダ，ミタイダ，ラシイであること，さらにこの場合，外部情報に依存していることを明示する文脈を補足した場合に疑問化の許容度が増している。

このような結果から，ムードの形式と疑問の共起関係を考察する際には，外部情報に依存した形式とそうでない形式で疑問化の許容度に違いが生じるのはなぜか（カモシレナイ，ニチガイナイとヨウダ，ミタイダ，ラシイの対立），外部情報に依存しない形式でも，真性のムード形式と疑似のムード形式とで疑問化の許容度に違いが生じるのはなぜか（ダロウとカモシレナイ，ニチガイナイとの対立）という２点から考察を進める必要があることになる。これまでの研究では，ダロウとそれ以外の形式という対立だけを考察の対象としてきたようであるが，これでは不十分であったように思う。以上の対立を図示すると次

のようになる。

真性ムードの形式	疑似ムードの形式	
ダロウ (疑問化可能)	カモシレナイ ニチガイナイ (疑問化不可能)	外的な情報を前提としない形式
	ヨウダ ミタイダ ラシイ ソウダ (疑問化可能)	外的な情報を前提とする形式

5 疑問表現について

ムードの形式と疑問化との共起制限を考える前に，疑問文の表す意味について考えておくことにする。

言うまでもなく，疑問化すると許容できなくなる文は，推量のムード形式を含むものだけではない。

(8) *（目の前に立っている人に）君は立っているか？

(9) *私は頭が痛いか？

(10) *（皆が初めて入った店で）ここのコーヒーはおいしいか？

(11) *あした地震がおきますか？

これらの現象から疑問表現の表す典型的な意味（自問自答のような場合ではない，問いかけ性を持つ用法）は次の様に規定することができるだろう。

I. 話し手に，命題を確定する情報が欠如している – 命題が不確定である –

II. 話し手は，聞き手が命題の不確定性を解消する情報を所有していると想定する

III. 話し手は，聞き手に情報の提供を要求する

疑問表現が許容されない場合，それはなんらかの要因によってI，IIのどちらかの条件が満たされない場合であると考えられる。

(12) *（目の前に立っている人に）君は立っているか？
（話し手が当然知覚可能という点でIに抵触する）

(13) * 私は頭が痛いか？（話し手が知覚可能という点でIに，聞き手が知覚不可能という点でIIに抵触する）

(14) *（皆が初めて入った店で）ここのコーヒーはおいしいか？
（聞き手も初めて入った店だとわかっているため，IIに抵触する）

(15) *あした地震がおきますか？
（通常発話時において把握不可能な状況であるため，IIに抵触する）

以上の考察から，疑問文は，聞き手が話し手の質問に答えられると話し手が想定できない場合，用いることができないということになる。

6　ダロウカとニチガイナイカ，カモシレナイカ

森山 (1989b，1992) の問題点として指摘したことだが，推量のムードが疑問化された場合疑問文のなかでも話し手の推量を表していると考えてよいのかという問題がある。

通常，疑似ムードの形式は疑問化されると「水が飲みたいか？」「君は行くつもりか？」のように聞き手の心的態度を表すと考えられるが，推量のムード形式の場合，疑問化されても話し手の推量を表しているのか，聞き手の推量を表しているのかはっきりしない場合が多い。

(16)　（子供が寝たかどうか妻に見てこさせて）
どうだ，もう寝たみたいか？

(17) おい，彼も来るそうか？

ここで問いかけられているのは「寝たみたい」という話し手の判断の妥当性なのだろうか，聞き手が「寝たみたい」と考えているかどうかということなのだろうか。同様に「来るそうだ」という話し手の判断の妥当性が問われているのだろうか，あるいは，聞き手が「来るそうだ」という判断（情報入手）を行ったかどうかということが問われているのだろうか。

明確にテストする方法がないために断言することはできないが，上記の例文では「妻」が「寝たみたい」と考えているか，「聞き手」が「彼が来るそうだ」という判断（情報入手）を行ったか，が尋ねられていると考えるのが自然であろう。つまり，推量の場合も疑似ムードの形式は疑問化されると聞き手の推量を表すということになる。[6]

[6]正確には，「話し手が聞き手の推量を想定している」ということになる。

このような，ソウダ，ミタイダ，ラシイが疑問化された場合，それが話し手の判断を表すものとして機能し続けているのか，命題化されて聞き手の判断を表しているのかという点は，これまでの研究では全く問題とされてこなかった。しかしながら，この点はムードの形式と疑問表現との共起を考える際には重要な問題となるように思われる。

カモシレナイ，ニチガイナイは疑似ムードの形式であるから，実際には疑問化できないものの，カモシレナイカ，ニチガイナイカという形をとった場合は，そこでのカモシレナイ，ニチガナイは聞き手の判断を表していることになる。推量というのは話し手が断定を避け，命題の明確な真偽判断を保留している形式であるから，判断保留を表す推量の疑似ムード形式が疑問文中にある場合，話し手は聞き手が判断を保留していると想定ー聞き手に明確な情報がないと想定ーしつつも聞き手の判断を求めるー聞き手に情報を求めるーということになってしまい，意味的に矛盾が生じ許容されない文となる。この場合，4節でのIIの条件「話し手は，聞き手が命題の不確定性を解消する情報を所有していると想定する」に抵触することになるわけである。

その一方で，真性のムード形式であるダロウは，常に話し手の心的態度を表し，疑問化されても話し手の推量を表し続けるので，聞き手の推量を問いかけることにはならず，カモシレナイ，ニチガイナイの場合の様に許容されない文とはならないと考えられる。

真性のムード形式は疑問化されても話し手の心的態度を表す，ということは，ダロウ以外の，シヨウ，マイといった形式においてもあてはまるものであり，シヨウカが聞き手の意思の問いかけにならないことの理由としても考えることができる。[7]

これまでの研究において，ダロウカが問いかけ性をもたない自問自答の疑いの文となることが指摘され，その理由として，それが問いかけ性を持たない形式として marked なものであるからとか，話し手の判断形成過程を表すものであるからといったものが想定されてきたのであるが，これは，ダロウが疑問化されても話し手の判断を表し続けているため，問いかけの対象となるのが話し手自身の判断であるということになり，自問自答の形式となっているのもそれゆえであると考えられる。

7 カモシレナイカ，ニチガイナイカとヨウカ，ミタイカ，ラシイカ，ソウカ

最後に，外部情報に依存しないカモシレナイ，ニチガイナイは疑問化不可能であるが，外部情報に依存するヨウダ，ミタイダ，ラシイ，ソウダは許容度が落ちるものの疑問化可能であるのはなぜかという点が問題となる。

[7]仁田 (1989) を参照のこと。

3節で見たように，ヨウダ，ミタイダ，ラシイは中間型として分類されたもので，話し手の真偽判断の保留を表しているだけでなく，外的な状況からある事態が推測されるということも表していると考えられるが，疑問化された場合にも問いかけの対象として「雨が降ることについて聞き手がどのように考えているか」という場合と，「外的な状況が雨が降るということを示しているか否か」という場合とが想定できるのではないだろうか。つまり，ヨウダ，ミタイダ，ラシイが，聞き手の判断保留を表していると解釈した場合は，カモシレナイ，ニチガイナイと同様の理由で許容しにくくなる。一方，外的な判断の根拠の存在の有無を問いかけていると解釈される場合，聞き手の判断保留と問いかけとの共起制限は生じて来にくいため許容されやすくなるという仮説を設定できるように思われる。[8]

このような仮説を用いた場合，ヨウカ，ミタイカ，ラシイカの許容度が2節で見たように外的な情報に依存していることを明示する文脈においてより大きくなるのは，問いかけの対象が「外的な状況が雨が降ることを示しているか否か」であることがより明確化されるからであるとして，統一的な説明が可能となる。

8 おわりに

本稿は，ムードの形式と疑問化の共起制限について，ダロウとカモシレナイ，ニチガイナイとの対立，カモシレナイ，ニチガイナイとヨウダ，ミタイダ，ラシイ，ソウダとの対立という2点から考察した。全体の枠組みを提示するという性格の論になり，個々の現象においてはさらに詳しい考察が必要と思われる。

また，本稿では触れることができなかったが，～カによる疑問化では許容されないカモシレナイ，ニチガイナイも，～ノを用いて疑問化することは可能であるように思われる。

(18) ねえ，明日雪が降るかもしれないの？

(19) ?本当に，うまくいくにちがいないの？

ヨウダ，ミタイダ，ラシイも～ノを用いて疑問化すると，～カによる疑問化よりも許容度が増すようである。このような場合，聞き手の発話を問い返す，あるいはすでに提出された発話を確認するという機能を持っていると考えられるが，このような機能が加えられることで，純粋に話し手の判断を問いかけるという意味から離れていっているのではないかと考えられる。しかし，この点についても，詳細な考察が必要であることから他稿に譲ることにしたい。

[8]近藤 (1991) では，「そうか」の疑問文の意味として，「つまり，質問の意味は〈あなたは，……ということを伝聞しているか?〉ということになる」と述べられており，本稿の立場と同様の見解がなされている。

参考文献

安達太郎 (1989).「日本語の問い返し疑問について」,『日本語学』8-8, 明治書院.

近藤泰弘 (1991).「ムード」,『講座　日本語と日本語教育第４巻』, 明治書院.

小金丸春美 (1988).「問答文におけるノダの使用条件」, 筑波大学修士論文.

高山善行 (1986).「＜推定表現＞と＜推量表現＞の交渉」,『待兼山論叢』20, 大阪大学.

寺村秀夫 (1979).「ムードの形式と否定」,『英語と日本語と』, くろしお出版.

寺村秀夫 (1984).『日本語のシンタクスと意味 II』, くろしお出版.

中右実 (1979).「モダリティと命題」,『英語と日本語と』, くろしお出版.

仁田義雄 (1989).「行こうか戻ろうか－意志表現の疑問化をめぐって－」,『日本語学』8-8.

益岡隆志 (1989).「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」,『日本語のモダリティ』, くろしお出版.

益岡隆志 (1990).「説明の構造」,『日本語の文脈依存性に関する理論的実証的研究』, 平成元年度科学技術費総合研究 (A) 研究成果報告書.

南不二男 (1985).「質問文の構造」『朝倉日本語新講座４　文法と意味 II』, 朝倉書店.

宮崎和人 (1991).「判断のモダリティをめぐって」,『新居浜工業高等専門学校紀要』27.

宮崎和人 (1993).「～ダロウの談話機能について」,『国語学』175.

森山卓郎 (1989a).「認識的ムードの形式をめぐって」,『日本語のモダリティ』.

森山卓郎 (1989b).「内容判断一貫性の原則」.

森山卓郎 (1989c).「コミュニケーションにおける聞き手情報－聞き手情報配慮非配慮の理論－」.

森山卓郎 (1992).「日本語における「推量」をめぐって」,『言語研究』101.

On Epistemic Modality in Interrogative Sentences

Tsutomu Makihara

As for Japanese depending on the circumstances one can or cannnot use the form of epistemic modelity in interrogative questions.

In this paper Ipoint out, based on reserch, evidential modality and darou can be used in interrogative sentences, and try to explain the reasons.